

相互行為・生活形式・生活世界

——（独日）対照社会文化誌の基礎——

丸 井 一 郎

（キーワード：言語相互行為、関係態、生活形式、生活世界、異文化、社会文化誌）

1. 問題の輪郭

拙論（丸井2004）で先行論文を要約しつつ述べたように、一般に言われるところの「異文化理解」、「異文化間コミュニケーション」における自他認識の特性について以下のことが重要である。異文化理解における相互性(相互行為の根本的な可能性)とは、他者の認識が必然的に自己の対象化を前提し、かつ結果する動的過程のことであり、自分の立つ場所から中立な他者の認識はありえない。日本列島に住む我々の場合は、この百年以上にわたって、いわゆる欧米の文物を移入し、評価は様々でありうるにせよ、非常に複雑に組織された生活の場と社会の仕組みを築いてきた経緯に、自他認識における負荷の一つの中心点がある。そのことの無自覚（誰かに似せて、誰かに対して見栄えのする自己像を仮構しようとする）ことと、たとえばアジア蔑視（様々に根拠のある類似が認知される故の差別・排除）とが表裏の関係であることも指摘されうる。（この線を追究する余裕は少ない。）他者の視点を構成する事象の網の目を理解し、仮設的にであれ、そこから逆方向に見ることができて初めて自己の像もより明らかになる。この意味で一方的なドイツ／フランス事情などではなく、原理的に視点の双方向性を意識した社会・文化の理解と提示を「対照社会文化誌」(kontrastive Landeskunde) と呼ぶ（以上上掲拙論からの要約を含む）。

本論考は、双方向的な自他認識過程としての対照社会文化誌の理論的方法的基盤につき、とりわけ（言語）相互行為理論による基礎づけを目標とする。それを通じて、様々な日常の行為をその最も原初的な成立のレベルから次第に上位の規定レベルへと総合しながら理解することを目指す。人の集まりの一形式として、たとえば共に食べるということのもつ相互行為的意味と意義を理解する視点を形成する。これは以下での論述を先取りするなら、生活形式としての位置（価）を問うことに当たる。

記号に媒介され過程的に実現される（言語）相互行為のできごとが、あるひとまとまりの社会行動として認定される仕組みを問うことは、その規定コンテクストを、多層性と多重性において解明することに当たる。相互行為の事象は、その過程の実現において、つまり行為内的にも、また実現された社会行動として、つまり行為外的にも極めて多様

な対象性を提示するが、従来両者相互を関連づけ、その基礎を解明する試みは少ない。

上の課題の理論的問題は広い意味での解釈学的な性質のものである。つまり、ある相互行為事象が内的に分析可能であることについては、それが全体としてどのような性質の社会行動（の種類）であるかを了解していることが前提となる。体験としてのまとまりが先行する。その全体的了解自体は、行為の諸類型が相互に形成する生態的布置という背景コンテキストでの同定を必要とする。つまり口論ではなく、じゃれ合っているのだという理解は、議論やからかいや説明といった類似の形式との対比上で意味を獲得する。そのひとまとまりの出来事は確かに個々の行為によって過程的に実現されるとはいえ、相互行為事象を過程的に構成する個々の行為の分析（内的分析）の加算では説明できない。ましてや全ての行為コンテキストに対して中立的であるような言語の記号的普遍性という仮構からは、連関が遠すぎて説明できない。

ここでは過程的構成のすべての機序（表現手段を含む）を自動的に措定する場合は、言語相互行為のレベルであり、既に一単位のまとまりとして完結した出来事を論じる場合は社会行動レベルに関わるとする。その上で言語相互行為（とその類型概念）を一段上の社会行動レベルから捉え直す必要がある。ただしその際、言語・行動としての被形式規定性（Formbestimmtheit sprachlicher Handlungen : Ehlich 1986）、および過程的構成の十全な評価が保証される続けるような構想であらねばならない。社会行動一般ということでは、どのような些細で偶発的な行為事象であれ、その名に値する。ここで問題となるのは、社会行動のなかで、特別な類型概念によって把握されうるような行為の形式、つまり「生活形式」である。さらにその諸形式の意味の母体であり、上位の規定コンテキストとして「生活世界」の概念を措定する。

上記の諸前提のもとに、地域社会という生活世界の実現形が相互行為によってどのように構成されるか、その一部分であれ解明できる理論上の枠組みを構想する。

2. 言語相互行為

筆者は著書（丸井2006）で言語相互行為の理論の基礎づけを試みた。その認識関心の基盤は、異質な社会・文化を背景とする行為者と行為者間の理解という事象から得られた問題意識である。この章では本編の課題に応える考察の出発点として、上掲著書で素描された（言語）相互行為概念の基本性格に基づき、それをさらに展開することを試みる。要点を、主体（参加者、人間、個人）の像、相互行為（コミュニケーション）の像、ことばの像に絞って述べる。

2. 1. 主体（個人）の像

相互行為概念の前提になる人間像は、エリアスの言う「常に複数で立ち現れる人間達」

(Elias 1976, LXVII) である (注1)。無前提に個人とやらが現れて、他の個人に向かってコミュニケーションするという像からは始められない。無力な乳児期以来、常に他者との相互依存関係の網の目の中で、認知能力を形成し、狭義の言語能力、自我、知能、社会的行動能力を発達させる過程そのものが共存と相互行為の過程であり、その中から当該集団でそれと認定される類の個人が形成される。方法的個体主義ではなく、共主体的観点から見ると、個人の像は、分析考察の出発点ではなく、歴史的発達史的過程の産物であり、説明されるべき対象である。個人は、常に情緒的・地域的・経済的・政治権力的など諸々の相互依存関係網 (関係態, Figuration : Elias 1976 I, LXVII) の中にあり、それらを作り出すことにおいて個人である。物的心的な個体が明示的にあるように、個々人のつくる関係も明示的で現実的である。関係は個人の属性からは説明できない (関係の性質が個人の属性に見えることはありうる)。関係は常に変化の過程にある。言語相互行為事象の説明を、全ての個人が普遍的に x の性質をもつ、という前提から始めることはできない。

もう少し具体的に例示しよう。世界中の多くの地域と歴史時代にそうであったように、日本列島のたとえば平安時代といわれる時間帯の一定地域にも厳しい身分制度があり、生物生態学でいう棲み分けに対応する現象が遍在したであろう。そこにもむしろ物的心的に識別認定できる個人はあった (はずである)。ある日ある時、たとえば土佐の国で隷属的身分の農民が領主に向かって「丁寧にものを言う」という事象は、そのままでは現代の日本社会になんらの対応を持たない。つまりこの言い方では当時の関係態の中の相互行為事象を、当事者が理解していたように、言い表すことは困難である。ほとんどの関係態の構成部門 (家族形態・関係、血縁・親族観、地縁、生産関係、権力・支配など) において対応がないからである。ことばを使っているという類的な共通項は、歴史的に形成され社会的に機能する関係の内実を説明しない。かの時代のなにか「丁寧」とやらに相当するらしいことがらと、現代の我々がそのことばで表象する事態との間に何らかの類似がある可能性はありうる。しかし、それは歴史的時間の長く曲がりくねった道を通って説明すべきものであって、「言語使用の普遍的規則」では説明困難である。

かの時代のように、およそある集団 (隷属集団) の成員が他の集団 (支配集団) の成員に話しかけること自体が許されているか否かが問題であるような状況 (違反には暴力による懲罰もありうる) は、現代の日本社会には、おそらくないと考えられる。しかし仮にその可能性が皆無ではないとすると、我々は、一方で「いや実際いたるところで問題である」という社会や、他方で「皆無である」という社会とは別の世界に生き、別種の質 (関係態内の位置値) を有する個人 (行為主体、参加者) ということになる。同様に、個々人の属性によらず、だれであれ家族や身の回りの人々と一定の帰結に結びつく実質ある話し合いや、共感に基づく生活の共有がありうると感受されている人々と、機能化された現代的な生産・消費の制度の中にしか対人交流の可能性がありえない (と観念している) 人々とは、同じ質の個人 (主体) 像の持ち主ではない。(その点で現代日本の多くの人間は「さみしい人々」である：後述。)

冒頭で述べた、(あらまほしき) 誰かに似せて主体の像、とりわけ自己像を形成(仮構)するという傾向は、近代以降の日本社会に顕著であり、学術的言説および学術的言説生産という形式の相互行為事象(=生活形式、後述)においても例外ではない。丸井(2004, 20)で示唆したように、「近代的自我」はその意味で「木村屋のあんパン」と等価である。

ヨーロッパ起源の学術言説や文学言説などは、我々にとって異質な社会の、つまり異質な関係態における追体験困難な歴史・社会過程をコンテクストとしている。そこで語られる「個人」(主体の像)が、別種の関係態とその来歴を背景とする者達(=我々とその祖先)が共有するそれと同じであるはずがない。「個人と社会」といった一見したところ普遍的な定式表現の背後には、未だ全てが見渡せずにいる多大な差異が隠されている。それら差異とありうべき同一を包括するべき「資本主義的生産体制」といった理論上の構成物からも、人類の言語使用の普遍という内実の希薄な抽象からも、特定の関係態内で「常に複数で立ち現れる」人々が共有する主体(自己)像は描けない。そのためにはそれ自体多層かつ多重である関係態をコンテクストとする(言語)相互行為という独自の対象レベルを設定することが要請される。

2. 2. 言語相互行為(コミュニケーション)の像

(言語)相互行為のできごとは、最も広く理解すれば、エリアスの言う相互依存関係の網の目(関係態Figuration)の一つの織り目(Figur: Elias 1991, 44)が今ここで実現される過程である。つまり、関係態の網の目としての社会の過程的成立のなかに組み込まれた微細な過程性がある。その際言語相互行為にあっては、上述のように言語行為の被形式規定性(Ehlich 1986)がとりわけ重要な特性となる。つまり、差異の体系に基礎をおく言語形式は、それがどのように目立たないものであっても、言語相互行為の成立と展開に対して何らかの影響を与える可能性を常に保持する。しかもそれは無前提にではなく、歴史的・社会的な意義関連と目的構造に規定された行為の内的構造に対応する形で形式化がおこなわれる。端的にはたとえば歴史のプロセスを経て制度の枠内で語彙単位にまで定式化された行為概念(「名誉毀損」、「告発」、「反駁」等々)はそれ自体で行為状況を規定する潜勢力を有する(丸井2006, 249)。

言語行為としての相互行為は、エーリヒ(Ehlich 1987, 27-29)のいう形式的協調、つまり相反する利害によって争うためにも成立していなければならない種類の協調によって特徴づけられる。形式的協調のもっとも基本的な様態は、対面的相互行為事象なら、互いに互いの態度表示や発話に意識を向け合うことであり、制度化された書記テキストなら言説の類に応じたテキスト生産・受容行為への意識的指向である。ちなみに、対面談話という相互行為の(類型ではなく)実現態は、経験的研究の対象として重要であるが、これが相互行為の中心あるいは代表というわけではない。とくに現代社会では、電子化されたものを含む非常に多様な媒介形式が問題となる。後述するように、思考や知

識も広い意味での（記号に媒介された）相互行為の領域に統合することが出来る。

協調の実現の様態について、指向される意義関連に対応する協調様式を識別することが出来る。最も原初的な区分は、同一と差異である。同一への指向は、共在（共存在）への指向と、差異は個在（個別存在）指向と親和的である。同一・共存への指向からは統合的な協調様式が派生され、差異・個在指向からは競合の様式が導かれる。前者は傾向として日本語による相互行為状況で多く見られ、後者はたとえばドイツ語によるそれにより顕著であるが、行為類型ごとの分布の差異によるものであって、どちらかに限定されない。

いずれにせよ、争うためであれ協調が成立するということは、恒常的なあるいは暫定的な共有領域が確保、措定あるいは仮設され、そのことで相互行為事象の持続が保証されるということにあたる。相互行為を通じて個的領域（個人性）が確保されるには、（一時的であるにせよ）なんらかの意味での共有領域の成立が条件となる。その逆ではない。共在が個在に先行する。

これまでの論述から、話し手Aが他の個人（聞き手B）に対して、予め保持されているある観念に対応する記号言語の（音声）表現を發し、聞き手によるその解読作業を通じて理解を成立させるという図式は誤りではないが部分的であり、更新される必要があることが分かる。それに代わって前面に出てくるのは、共主体的共有領域を維持・確保しながら、当事者達にとって単一で共通の（＝人と人の間の）出来事、例えば（殴り合いではなく）罵り合いや口論を、言語・非言語表現を手段にして、共同で作り上げる行為者達という像である。その過程全体の帰結が「全てから孤立する個人」（Elias 2001, 35f.）の像の再生産であることもありうる。ただしその場合、一時的であるにせよ成立していた協調における共有性（共有領域）は、エゴロジカル（ego-logisch）な意義関連に兌換されて評価され、反省的意識で捉えられることは少ない。デカルトが忘れていたことがあることに気づくべきであろう（Elias 1991, 264-265、下の2. 3. も見よ）。

いわゆる異文化間コミュニケーションということで問題となる事象は、以上の行為者と相互行為の像から派生されうる（丸井2006, 252-253）。

*＜共・間主体的共有領域の維持確保＞：

集団ごとにその成立・存立の前提条件、様態、期待内容が異なる

*＜単一で共通の（人と人の間の）出来事＞：

出来事のカテゴリー化が異なる

例えば一方にとっては罵り合いや口論、他方には活気ある議論

「異質者との相互行為」（そのようなものとして作り立てられた異文化間コミュニケーション）の内容と実現様態が異なる

制度化の来歴、度合いなどによって社会行動の像が異なる

社会の構成（相互依存関係網、関係態）自体が異なる

*＜言語・非言語表現を手段に＞：

この意味作用の差異がさしあたり最も明白、異言語は理解不能

* <共同で作り上げる> :

手順 (行為範型、範型構成項、範型の実現手順、使用表現) が異なる

この項についても最後に繰り返し指摘したい。ひとまとまりの相互行為事象 (対面談話など) は、そこに現れる言語表現や発話行動を初めとして、非常に多様な対象性を観察者に提供するが、体験された全体 (ひとまとまり) が先であって、個々の析出された構成要素とその分析から見いだされる性質を加算しても、全体にはならない。

2. 3. ことば

ここで主題となるのは、言語ではなく「ことば」である。相互行為の中に現れることばは、三つの側面において体験される。それらは社会行動、生理・心理・認知過程、そして記号態である。さらに要約すれば、社会、心身、記号である。以下それらの概要を示す。

1) 社会行動

ことばは身振りなどをともなって、まずあるまとまりの社会行動として意図され理解される。人が生まれて育ち暮らすのは、相互行為を含めた人々とのやり取りの世界である。このことは、関連する語彙や言い回し (慣用表現) などに現れる。例えば日本語では、「失礼な奴」「気が利く」「生意気だ」「すなおな」「名誉毀損だ」「見合い」「面接」「開会宣言」「脅迫」「腰が低い」などなど、多数の表現が見られる。社会行動の上で重要だとされる事象が、メタコミュニケーション的に自覚され、語彙や句として記号化されることに注目される。

2) 生理・心理 (認知) プロセス

この側面は既に意識されにくく、不本意な機能不全や特別の意識の集中時に自覚される傾向がある。専門用語を除けば、関連の言い回しなども少ない。「起き抜けで、飲み過ぎで、口が回らない」「ヒアリングがだめ」「思いを凝らす」「よくよく考えた」などがそれに当たる。この側面が最も痛切に自覚されるのは病変や外傷などで脳や発声器官に障害が生じた場合である。この側面で、異言語学習の際に重要なことは、母語におけるのは別の身体性 (筋肉の使い方)、リズムやメロディの聴取や作り方、情報の別様の組立て方などである。

3) 記号態 (記号システム)

理論的な意識化の活動を除き、日常ではこの側面はさらに自覚されにくい。いわゆる外国語学習ではこの側面が問題領域となる。理解不可能な異言語の異音声との接触が言語の記号性を暗示する。この側面に関連する日常的な慣用表現はほとんどない。「文法」「語彙」「主語」といった用語の関連領域である。用語に対応する文法カテゴリーなどを実体化、あるいは物象化して取り扱うことも、ある生活形式の一部ではある。

これらの各側面について、それぞれ主題的に取り扱う研究分野が形成されてきたことは指摘するまでもない。思いつくだけでも以下の通りである（重複あり）。

- 1) 社会行動：（言語）相互行為理論、相互行為の社会言語学、社会学一般、民族学、社会科学の各分野（法学、経済学）、（動物）行動学、自然／文化人類学、歴史学、等
- 2) 生理・心理過程：認知科学一般、発達科学一般、言語／発達／社会心理学、心理言語学、神経心理学、（高次機能の）大脳生理学、言語障害学、医学・生物学一般、等
- 3) 記号態・記号システム：言語学一般、理論言語学、歴史言語学、（文学・芸術）記号学、テキスト理論、言説理論、民族誌記述、等。

ここで重要なことは、これら三側面が統一された全体であることを改めて考慮することが、どのような帰結をもたらすかということである。つまり分析的でなく、総合的で人間学的な「ことば」観とはどのようなものかという問いである。その一つの答えがエリアスの最後の著作『シンボル理論』（Elias 2001/1991）である。

この著書の中心課題は、どのような流派であれ「言語」に関連する研究分野を学びそれに関与する者には極めて理解しがたいと思われる。理由は、設定された視点とそれが描く光景が、現代に至る「言語」研究のそれと大きく異なるからである。エリアスは、複数の人間が集団において同時的に存在することを前提とするという意味で、ことばこそ「社会的事実の原形的モデル」（同書37）であるとするとする。これはつまり個人が選ぶ前に個々人の間の共有性が要請され前提されているという事情に当たる。ことばに関わるすべての事象は集団に統合された複数の人間の存在を必然とするとも言える（注2）。

本論文はエリアスのシンボル理論の組織的な論究を目的としたものではないので、ここでの論旨にとって重要な事項に限るが、彼の理論では、以下のような点が、声によって伝えられることばというシンボル体系の特質として提示されている（非常に大まかな要約なので該当箇所を示さない。Fröhlich 1997も参照した。筆者による補足は括弧に入れる。）

- ・ことばを学ぶ能力は人類に普遍的であるが（心身の側面）、現実に習得されるのは、ある特定のことばである（社会の側面）。
- ・地球上には何千という種類のことばがある。ことばは結びつけ、かつ切り離す。（社会的に非常に重大な意味を持つ事実である。連帯と友愛、排除と差別）
- ・人間のことばの特質は、ここと今から抜け出て、現実に存在することも存在しないことも提示する能力である（ヘーシェンの言う言語行動の根本的間接性：Heeschen 1980, 262-263）。時空の四次元に加えて、人間はシンボルが媒介する第五の次元にも住む。
- ・知識はことばによって、人から人へ世代を超えて伝えられる。知識は個人領域ではなく、ことばを共有する特定社会に属する（共有性としての知識）。
- ・社会的な性格のシンボル体系は社会の仕組み、とくに権力関係によって標準化される。

生存単位としての集団ごとに特徴的な発話の規範が必要とされる。

- ・発話／言うことと、思考／考えること、知識／知ることは、シンボルを操作する点で同一の総合レベルにある。(上掲の様々な専門領域、研究分野の領土分割は任意で仮初めのものである。)

以上人間学的な総合レベルから見たことばの像の一つを示した。我々の課題は、経験的に操作可能な形で、問題と研究プログラムを構想し提起することである。例えば、ことばによる社会行動の類型と実現様態が、個別言語ごとに、どのようなメタコミュニケーション表現で捉えられているかといった問題である。

3. 言語相互行為から社会行動へ

以上のような性質をもつ言語相互行為の事象を社会行動として捉える上でどのような視点の拡大や付け替えが必要か検討する。

言語行為としては「(窓を開けるよう) 要請する」「お願いする」という極めて単純で原初的(「普遍的」)な類型について、日本社会の権威関与的な状況内(会社の会議)での社会行動として構想されるべき場合には、多種多様な変異が可能であるとイメージされていることを指摘した(Ohama/Marui1983, メタ理論的再説は丸井2006, 216-219)。そのものを名指す単純な発話ではなく、発話自体の回避(「がまんする」)、発話に替わる兆候提示行為(「察してもらう」)、名宛ての間接化(「隣の人にいう」)・多重化(「皆に聞こえるように」)、などなどの選択可能性があるとされている。社会行動としては、権威関係の負荷がある制度内で「我が身の危険」を回避することが意義関連である。関与する行為主体の像は孤立した個々の「話して-聞き手」ではなく、「少数の権能者-多数の非権能者(その中の一人)」であることに注意が必要である。遅刻しないこと、不用意に目立たないこと、気が利かなく思われぬようにすること、などなどと同列の「相互行為原則」(丸井2006, 43-47, 212-220, また大浜1994)が想定される。言語相互行為から社会行動への通路は行為状況の社会的特質(関係態)の精密な評価にあると考えられる。

では社会行動の諸類型の分布、生態的布置と言語相互行為事象とはどのように関連するのだろうか。そのことをこれも拙著で再説したライネルトの事例(Reinelt 1983, 219)の再解釈を通じて示す。

事例 A

(米国人男性Mがある県庁所在地近郊の自宅で庭仕事をしていると、見知らぬ日本人Jが話しかける。)

J: 外人ですか

M: いいえ、日本人です

J: 働いているんですか

M：いいえ、寝ているのよ

(J、失望して立ち去る。M、頭を振って仕事に戻る。)

<言語相互行為理論レベルの分析(丸井2006, 258f., 一部省略)>

「周知の知識であれ、目前の自明事であれ、それを明言すれば少なくとも一定の共有領域が成立する。あるいはより大きな共有領域設定への用意があることを確認する方策としても理解されうる。この事例でJは、話しかけは可能である、基本的共有領域は存立するとの前提から出発し、話しかける。彼は共有領域の確保と拡大、つまり彼がそう考える意味での協調を達成するために、まずは自明事の確認から始める。一方のMは、Jが冗談を言うことで遭遇的対話を開始しようとしていると解釈して、単なる肯定や情報の提供でなく、むしろ同じような冗談を返すために最大限の対比の原則に従う(外国人-日本人)。一回目の空転の後で、Jはさらに確実な目前の事象に言及する。いかにもMは庭仕事をしている。Mは再び最大限の対比の原則によって冗談を先鋭化する(働く-寝る)。空転は決定的となる。Mが最初の質問に対して『そうです』と答えていれば、『万事が納まった』であろうが、Mは別の社会の別の生活世界で別の社会化過程を経ており、その可能性は想像さえできなかった。」

このできごとの言語相互行為としての過程的な性質は上記の再構成で理解される。社会行動のレベルから検討するには、出来事全体の変異の可能性を吟味する必要がある。このやり取りが次のようなものであったら、それはどのような(別種の)社会行動事象として理解されるだろうか。条件として、場所は事例1と同じ集落の公道上の工事現場で、参加者は工事会社の従業員(D、若い日系非白人)と土地の古参の住民(K)としよう。

事例B：対比のための模擬事例

(工事現場の休憩時間に散歩中のKがDを見かけ話しかける)

K：あんた外人さん？

D：いや日本人よ

K：どっからきとるん？

D：姫路

K：おとやんはどこや？

D：ドミニカ

K：ほら見てみい

事例Aの特質は模擬事例Bとの(模擬的)対比で明らかになる。Aでは、一方の参加者について、「庭いじり(庭仕事)」、「余暇」、「(庭付きの)自宅でくつろぐ」、「白人の外国人」などなどの項目が、Bの「雇われ人」、「路上で作業中」、「賃働き」、「出稼ぎ」、「非白人の外国人」と対比される。Kの態度もその対比に照らして納得できる変異を示すと

解釈できる。

この思考実験が全般的はずれでないとするれば、事例Aを単純な「異文化間コミュニケーション」の事例、悪意のない両者にとってなぜかうまく行かない接触開始の事例として理解するだけでは不十分であることが分かる。事例Aはむしろ上で示唆した「(わざと)作り立てられた異文化間コミュニケーション」の性質を有する。ただしこれはより多くJから見ての理解である。Mの自己領域(領域性)が尊重され、侵害から守られるのは、Mが当然のこととしてあてにできる人類普遍の原則からではなく、むしろ彼が日本(の地方中心都市郊外の一戸建て住宅)に居住する白人の外国人男性だからである。Jの「あっさりした引き際」は、悪意のない(自信のないとも言える)タイプの「異質者との相互行為」を実現している。

対比的に模擬事例Bは、さらに明白に「異質者との相互行為」が一方向的に実現される場合を想定したものである。Mに対しては不可能であった(自分でそのように一方向的に理解してしまったのだが)異質者への統制行為(出自のチェック:「わりゃなんぼのもんぞ」)が貫徹される様子が想定的に提示される。なぜMには遠慮し、Dにはずけずけと話しかけることが、ありうるべき変異なのか。

上で示した二種類の解釈に見る視点の差異が、ここでいう相互行為から社会行動への(離断的でない)視点転換にあたる。一人JやKにとってだけでなく、我々とその身の回りに生きる人々は、程度の差はあれ、事例Aと模擬事例Bとが、実行(自己の)と解釈(他者の行為)の両面においてどのような意味と意義をもつかを理解できるような世界に住んでいる。対比すれば「いかにも」と思える態度の違いは、(全ての偶発性を許す)社会行動が(繰り返し性を有する)生活形式、ここでは二種の「よそ者との遭遇」として捉えられていることを示唆する。以下では生活形式の概念について検討する。その際重要なことは、ここでは一つの対比可能性しか示さなかったが、ある形式は常に他の形式との差異によってその意味を獲得するという、および生活形式は、ことばがそうであるように、私一人にとってではなく、私たちにとって共有された形式性であること、この二点である。

4. 生活形式と生活世界

4. 1. 生活形式

この概念は、比較的最近ではヴィトゲンシュタインの『哲学探究』(19節, 23節)に使用されて以来、社会行動の考察に広く用いられてきた。意識の哲学としての現象学にもそれに先行する使用例がある。歴史家アルノ・ボルスによると、遠くは古典古代や中世にさかのぼるこの概念(ラテン語としては*forma vivendi*)は、近世における忘却の後、ゲーテ、ロマン派による復活を経て、十九世紀後半(1886年)以来人類学的・民族

学的な学術用語として再登場する (Borst, 19, 31-33, 344f.: ヴントやホイジンガさらにはシュプランガーの名が挙げられている)。ここでは目的本意の操作的な定義が主眼であるので、思想史的学説史的な追跡作業は行わない。

生活形式概念について、一社会全体という大規模なコンテクストを背景とする社会史的な定義は、上記ボルスト (Borst 1973, 14-) にあり、それは要約すると、「時代や地域によって様々な条件を負わされた人間達が、共に集まりを維持し生存を可能にするために歴史的に形成し習得・実行してきた行動様式」のことを言う。ボルストは死すべき肉体を備え、生老病死の労苦に曝されたという意味で人間の条件 (*conditio humana*、同書 29 以下) の側面と、人間達の作る共同体 (*societas humana*、同 341 以下) の両側面から中世ヨーロッパの生活形式を多面的に描いている (783 ページの大作)。その点では当該概念は、ボルストのいう生活圏 (同 20: 宮廷や市場や修道院など) による階層的な差異はあれ、一時代一社会の多数の成員に共通する行動様式に関わる。そう言う意味で、「生存形式」という表現も当たるだろう。

上の時間的空間的に見ていけば最大モデルに対比して、本論考の基本的視点を成す (言語) 相互行為理論は、個々の行為をも対象とする点で、より低い対象レベルを想定している。この視点レベルからの定義としては、「程度の差はあれ特定の意義関連のもとに繰り返し実行されることによって類型化され多くの場合言語的に命名された社会行動の類型」とすることができる。社会史的な観点はマクロレベルに関わり、相互行為論的なそれはミクロレベルである。

極大・極小双方の意味での生活形式の性格づけと相対的定位のために、従来の社会理論のなかで定式化されてきた、人間の社会行動一般の像について一瞥する。尾関 (1989) の書名『言語的コミュニケーションと労働の弁証法』が端的にあらわすように、人間の行動の二大カテゴリーは「労働」と「コミュニケーション」(ここでの用語では「相互行為」) である。自然環境への働きかけ (生存のための資材の確保) と人間相互の働きかけ (共存在の調整による集団の形成保持) とがそれぞれの特性である。さらに特性化を進めるなら、原形的には、前者は対物的即物的行為であり、後者は記号的相互指向的行為である。生活形式はこの両側面の統一態であり、そのようなものとして評価されねばならない。

このことを強調するのは、本論考では相互行為の側面に焦点を当てるものの、上で言う意味で人間行動の統一態において、様々な程度に記号によって媒介された (= 多くは言語相互行為として実現される) 生活形式がどのような生態的位置を占めるかを明らかにしたいからである。上記のような理念的な二大区分の直接的な適用が現代社会では困難であることは、筆者のようにコミュニケーションが労働であるタイプの職種がむしろ多くなっている事実からも理解される。さらにその少し向こうには、「共食」という生活形式が定位できる領域があると考えられる。

歴史家ボルストは一時代 (ヨーロッパ中世) を特徴づけるような規模での生活形式について、自己保存や自己確認といった切実な欲求や関心を充たすこと、社会的声望や遊

技（競技）と言った慣習や制度を保持すること、献身や禁欲といった倫理的規範や価値を養うこと、という三つの機能をもつとする（上掲書20-21）。これは社会史の視点からは当然のこととして、マクロレベルで完結した出来事全体についての事後の遠望であり、生活形式もその中に位置づけられる。実際ボルストはヨーロッパ中世への「Nachrufe：（後代の）様々な追悼の辞」という節さえ設けている（同660-666：後代のエラスムスなどの生活形式観に言及）。

相互行為理論からは、このマクロの視点は一義的に extra-kommunikativ（行為外的）と呼べる。我々の立場では、参加者としての行為内的なそれと、観察者の行為外的な視点、そして両者の動機付けられた転換が重要となる。相互行為理論の（ミクロな）レベルでは、生活形式とは、むしろエリアスが対話事象について述べたように（Elias 2001, 77）、相互行為的（原文では「コミュニケーション的な」、及び「対話の」）な関係構造が、ある関係態内において成立することであり、またその産物として同定されるべき形式である。その最も包括的に見た機能は、当事者達がそのように共主体的に理解する意味で、生きられる生活の場（生活世界）の構成である。3章で述べたように、形式としての一生活形式は、他の諸形式と共に特定領域内に生態的に布置されており、その生態的な布置における他形式との差異によってその意味を獲得する。

4. 2. 生活世界

次の問題は、上で述べたミクロな行為レベルから見る生活形式が位置づけられるべき直上の規定コンテクストは何かと言うことである。これを生活世界の概念で表す。

「生活世界（日常世界）」の用語・概念も「生活形式」に劣らず複雑な歴史的学説史的背景をもつ。メールト／ツィーグラー（1990）は、この概念を中心にして、社会学内部でのマクロ（社会構造）指向－ミクロ（個別行動）指向という両極の対置図式と、その相互媒介に関する方式（一方の切り捨てを含む）における諸傾向を展望し、それらを統合する新視点について論じている。ここでも学説史的な追跡は問題ではないが、メールトらの提示からも明らかになる点は、現象学的解釈的方向と唯物論的実践的方向という流派の差によらず、また生活世界（日常世界）という概念の重要性を強調するにもかかわらず、その内実と構成について、超越的でも理念的でもない経験的な構想がないということ、および意識の主体であれ実践する個人であれ、いずれも孤立した主体像が前提となっていることである。孤立した主体間で情報がやり取りされ了解が達成されるというコミュニケーションの電話モデルからの脱却は大きな困難を伴うようである。

ここでの操作的な生活世界概念の定義は、それ自体共主体的な（言語）相互行為に基盤を置く生活形式の共主体性を評価して、「生活世界とは、共主体的に保持される関係態の結節項として、諸生活形式の生態的配置によって構成される場であり、個々の生活形式の意味の母体である」とする。もう少し現象に近い表現では、「家族を初めとする身近な人々と共に在り、生活上の日々の必要を充たすために行動すること、その自覚され命

名された、あるいは自覚されない方式・手順と、当の行動の及ぶ時間的空間的範囲が生活世界をなす」(丸井2004, 21)とすることができる。生活世界は生活形式の基礎である(言語)相互行為の多重の網目を必須の前提とする。このレベルで重要なことは、個々の相互行為事象とその内的(過程的)構成ではなく、それらの動機づけられ累積した関係網である。その関係網は、一定の期間存続することで、参加者達自身にも自覚され命名されることがある。場合によっては、制度として規約化されることもありうる(いつもの飲み会、句会、同人、～研究会、などなど)。

この点で、生活世界のより実態に即したイメージ化と経験的研究にとって極めて示唆的な業績は、言語学的談話研究者カルマイヤー(Kallmeyer, 1994/1995)の編著になる膨大な調査研究の集成“Kommunikation in der Stadt”『都市のコミュニケーション』である(全4巻、総2000ページ以上)。この研究プロジェクトでは、都市住民集団に関する大枠の記述は民族誌的方法が、記録された個々の談話事象の叙述には言語学的な会話分析の技法が採用されており、後者が研究の中心をなしている。マンハイム市内のいくつかの地域に特徴的な集団内(下町の「手芸グループ」や高学歴者の「文学グループ」など)での様々な相互行為形式について、個人面接や録音・転写資料に基づく研究が行われた。そこで重点的に分析・解明されたのは、それぞれのグループで自分達とそれ以外の人物についてどのように語るか、つまり社会内小集団のアイデンティティの確認と保持、およびグループ内で相互行為がどのように調整されるか(集団自体の構成と存続)についてである。プロジェクト全体では小集団を「人々の交流世界(soziale Welt)」と定義している(Kallmeyer1994, 22ff.)。

上記プロジェクト研究では、言語学的談話(会話)分析に重点があることから、それぞれの小集団とその母体である(都市)社会は、言及・詳論されるものの、所与の全体として扱われている。全くの部外者である我々の目からは、一方で従来アクセス困難な世界について(文学作品などよりも)興味深い情報や洞察が得られるが(未知の生活世界探訪)、他方では問題の「交流世界」の全体的な生態的布置における位置についてなお不明確の感を免れない。そこには「あらかじめ理解された全体」についての共有された像が前提されていると考えざるを得ない。彼の地で「ネイティブ」としての研究者達にも、学的自己対象化を超えて共有されているらしい全体像と、その中への「生活世界(交流世界)」像の定位について解明するのが対照社会文化誌の一課題である。たとえば、我々には愛好団体など市民団体の隆盛とその公的助成という背景知識が欠けている。上記「手芸グループ」はマンハイム市の援助を受けている。ここでも「日常」と「制度」は相互排除の関係にはない(注3)。

5. 展望：相互行為・地域社会・飲食

言語相互行為・社会行動・生活形式・生活世界と辿った考察の目的は、本稿の冒頭と、

また直ぐ上に述べたように、研究者が単一の言語・文化・社会を対象とする考察において所与の前提とする「理解された全体」を、潜在的にであれ、もう一つの異質な全体の理解と付き合わせることで、それぞれ単一的考察では見えない人の集まりの条件（ボルストの言う *societas humana*）を解明する基礎を獲得することにある。さらに遠い目標としては、エリアスに従って、言うこと、考えること、知ることがシンボル操作について同一の総合レベルにあるとするなら、一方で共に食べることは、どのようにして社会行動であり、相互行為に基礎を置く独自の生活形式でありうるのか、という問いへの答えを定式化する道筋をつけることがある。当面の見通しとしては、五明（1996）の書名（『<食>の記号学 ヒトは「言葉」で食べる』）が示唆するように、ここでもシンボル化作用の多大な働きを想定できる。

ただし発生・発達のにはむしろ逆の過程が想定される。様々な活動領域、特に身体的共存在における「共にする」ことの根本的可能性と体験の累積の上ではじめて、被形式規定性で特性づけられる言語相互行為の可能性が現実化する。それ以前からそしてその能力獲得の全過程において、人々の集まりにおける共主体性が成立している必要がある。その関連においては、むしろ共にあり食べることの原形性、優位性を想定できるだろう。もちろん、より大きな記号の操作能力を獲得すれば、体験が遡及的に再把握され再組織される可能性を見過ごせないとはいえ、であるが。

人々の集まりという一般的な概念をここでは共主体的に保持される生活世界という概念を援用してより具体化する提案を行った。さらに経験的に検証可能な作業へといたるには、観察可能な現実の比較的大きな断片を方法的に構成する必要がある。この目的のために、たとえば現実に働きかけ可能な地域社会という単位を措定することができる（注4）。その存立と持続のプロセスの中に相互行為的生活形式、あるいは偶発的社会行動としての飲食行動を位置づけることができると考える。つまり共に食べるということ、労働カテゴリーに属する再生産や栄養摂取ではなく、生活世界の保持・実現という相互行為カテゴリーから特性化することに当たる。ひるがえってここでも「常に複数で立ち現れる人間達」が作り上げる相互行為の網の目こそ地域社会の構成存立に不可欠の要因であると言える。

上の関連でたとえば現代のドイツ語圏や一般にヨーロッパで普及している非営利的自発的な市民団体の組織と活動は、それが日本社会で一般的でないという理由だけでも、注目に値する。人々が共同で保持し、公的にも助成される社会行動の具体的な可能性の像は、直接的に当の人々の自己像と他者像に影響する。つまり行為を通じて具体的に保持できる共同の関係性（関係網）の共有された像から離れて、「自己」「個人」「主体」「他者」の像を論じることは出来ない。その意味で現代日本の多くの間人は「さみしい人たち」であることに上で言及した（注5）。

注

（本論考では、引用の出典や注記的な記述も本文中に取り込んで、注をできるだけ少なく

するよう試みた。以下では、本文に統合できない論述のみを示す。

1)

エリアスに注目するのは、ヨーロッパの歴史的コンテクストにおける個人化の傾向 (Individualitätsschub) を、業績や進歩や普遍現象としてではなく、避けがたくもあり病的な帰結をも含んだ非意図的な歴史的展開の一事例として捉える視点を提供するからである。「主体」や「理性」概念の歴史的被規定性、部分性を問題にする視点であり、エリアス自身の自文化中心主義をも摘出する可能性を与える。

2)

この点で、今のところ思いつきの段階にすぎないと見られるが、言語への認知的アプローチについて全く新しい構想を可能にする見方は、「日本語というような言語は脳の外にある。脳はそれに適応しているだけだ」という養老孟司氏の着想である (養老・茂木 2003, 9-11)。

3)

最近の経験科学的な生活世界研究には Ueltzhöffer (2000) がある。これは市場 (マーケット) 研究を背景とし、論述では「生活世界」の用語ではなく、フランス語起源の用語「ミリュール」を用いる。とりわけ消費行動によって高度に細分化された生活圏の差異を調査分析するものである。

4)

理論の構成に関する論述なのでこういう記述になるが、理論の経験化のために適当かつ任意に地域を対象とするのではなく、認識関心、参加への指向としてはもちろん我々の現実状況への全体的判断 (当然権力関係をも含めた利害に関わる) が先行している。しかしここでも全体的判断の検証は理論によるという循環から逃れることはできない。

5)

たとえば2005年に公表された政府からの委託研究による資料 (Gensicke et al. 2005) では、人口8千2百万人強のドイツ連邦共和国で、2千3百40万人 (14歳以上) が自発的に様々な社会活動に参加している (成人では三人に一人の率)。これを生産活動として見るとGDPの数パーセントにあたとされる (170億ユーロ、約2兆5千億円以上)。地域の中に相互行為ネットワークが幾重にも組み合わさって展開していることが地域生活の「分厚さ」の支えになっている。活動舞台の多くは公的に登録された団体で、ドイツ語でフェライン (Verein, 登録団体は eingetragener Verein = e.V.) という。この種の市民団体の数は、2001年には54万5千、2005年には59万4千である。2001年に日本のNPOは5千だった。現在調査中の人口2万のヴァルトキルヒ市に240の登録団体、人口1万2千のヘアスブルックに150団体がある。この点では、「パトナムの言うように、アメリカではこの25年間でますますクラブが少なくなり、多くの人々が一人だけで黙々とボーリングをするようになってきているが、ドイツではユッティングの研究にあるように、ますます多くのスポーツ愛好会が設立され皆で共に競技する人々が増えている。自発的

に、無償で、自治的にというNPO哲学に従う人々をフェラインは組織し動機づける。」(Crede 2000, 16-19) ということで、この関連では「欧米」というくくり方も問題であろう。

引用及び参考文献

Borst, Arno (1974)

Lebensformen im Mittelalter, Ullstein.

Crede, Danela(2000)

Der Verein als zentrales? Element bürgerschaftlichen Engagements?, Münsteraner Diskussionspapiere zum Nonprofit-Sektor, Nr. 9, ARBEITSSTELLE AKTIVE BÜRGER-SCHAFT, INSTITUT FÜR POLITIKWISSENSCHAFT, WESTFALISCHE WILHELMS-UNIVERSITÄT MÜNSTER. (<http://www.aktive-buergerschaft.de/vab/resources/diskussionspapiere/wp-band09.pdf>)

Ebert, Helmut (2004)

Was ist eine "Stadt"? - Sprachliche Zugriffe und geistige Ausgriffe am Beispiel der Leitbild-Diskussion einer Reformkommune, In: Busch, Albert/ Stenschke, Oliver (Hgg.): Wissens-transfer und gesellschaftliche Kommunikation, 225-234, Peter Lang.

Ehlich, Konrad (1986)

Die Entwicklung von Kommunikationstypologie und die Formbestimmtheit des sprachlichen Handelns, In: Kallmeyer, Werner (Hg.): Kommunikationstypologie, 47-72, Düsseldorf.

Elias, Norbert (1976)

Über den Prozeß der Zivilisation - Soziogenetische und psychogenetische Untersuchungen, Bd.I/II, Suhrkamp.

Elias, Norbert (1991)

Die Gesellschaft der Individuen, Suhrkamp.

Elias, Norbert (2001)

Symboltheorie, Suhrkamp.

Fröhlich, Gerhard (1997)

Denken, Sprechen, Wissen als primär symbolische Aktivitäten. Die Symboltheorie bei Norbert Elias, <http://www.iwp.uni-linz.ac.at/lxe/wt2k/pdf/EliasSymbolTheorie.pdf>

Fröhlich, Gerhard (1999)

Habitus und Hexis. Die Einverleibung der Praxisstrukturen bei Pierre Bourdieu, Online-Texte, Kulturtheorie und Wissenschaftsforschung, Universität Linz. (<http://www.iwp.uni-linz.ac.at/lxe/wt2k/pdf/FrohlichHabHex.pdf>)

Gensicke, Thomas/ Picot, Sibylle/Geiss, Sabine (2005)

Freiwilliges Engagement in Deutschland 1999.2004 - Ergebnisse der repräsentativen

Trenderhebung zu Ehrenamt, Freiwilligenarbeit und bürgerschaftlichem Engagement -
Durchgeführt im Auftrag des Bundesministeriums für Familie, Senioren, Frauen und Jugend,
(<http://www.bmfsfj.de/bmfsfj/generator/Kategorien/Publikationen/Publikationen,did=73430.html>)

Hess-Lüttich, Ernest W.B./Meister, Nina (2003)

Nachhaltigkeit. Zu einem Schlüsselbegriff in der politischen Kommunikation, In: TRANS.
Internet-Zeitschrift für Kulturwissenschaften. No. 15. WWW: http://www.inst.at/trans/15Nr/06_4/luettich15.htm

Mörth, Ingo/ Ziegler, Mainrad (1990)

Die Kategorie des "Alltags" - Pendelbewegung oder Brückenschlag zwischen Mikro- und
Makro-Ufer der Soziologie?, In: Österr. Zeitschrift f. Soziologie, 15. Jg. Heft 3, 88-111 Wien;
(<http://soziologie.soz.uni-linz.ac.at/sozthe/staff/moerthpub/Alltag.pdf>)

Sugitani, Masako (2004)

"Landeskunde" als Kontextwissen in der Lehrerbildung für Deutsch als Fremdsprache in
Japan, In: Busch, Albert/ Stenschke, Oliver (Hgg.): Wissenstransfer und gesellschaftliche
Kommunikation, 121-140, Peter Lang.

Ueltzhöffer, Jörg (2000):

Lebenswelt und Bürgerschaftliches Engagement - Soziale Milieus in der Bürgergesellschaft -
Ergebnisse einer sozioempirischen Repräsentativerhebung in der Bundesrepublik Deutschland
2000, Herausgeber Sozialministerium Baden-Württemberg. (<http://www.hs-weingarten.de/~beck/lebenswelt.pdf>)

エリアス、ノルベルト (波田節夫・道籐泰三訳、1991)

『参加と距離化 知識社会学論考』、法政大学出版社

エリアス、ノルベルト (徳安彰訳、1994)

『社会学とは何か 関係構造、ネットワーク形成・権力』、法政大学出版社
大浜るい子 (1994)

決意表明とは何か - 学校内の言語行動、『広島大学教育学部紀要』、2 - 43、319-326
尾関周二 (1989)

『言語的コミュニケーションと労働の弁証法』、大月書店
五明記紀 (1996)

『〈食〉の記号学ヒトは「言葉」で食べる』、大修館書店
佐藤慶幸 (1991)

『生活世界と対話の理論』、文眞堂

ハーバーマス、ユルゲン (河上倫逸他訳1989)

『コミュニケーション的行為の理論 上・中・下』、未来社
ハーバー、ザビーネ (2004)

ドイツの代表的なNPOである「協会」とはなにか～「公益性」を中心にしたNPO
振興策の事例～、＜持続可能な地域社会からのメッセージ⑦＞、日本政策投資銀行フ
ランクフルト駐在員事務所、F-89、駐在員事務所報告、国際部

http://www.dbj.go.jp/japanese/download/br_report/frankfurt/f89.pdf

丸井一郎 (2004)

異文化理解における生活世界の諸関連－ドイツ語圏の飲食を中心に－、『国際社会文化
研究』、5、19-48、高知大学人文学部国際社会コミュニケーション学科

丸井一郎 (2005)

環境・飲食・「スローシティー」、『国際社会文化研究』、6、1-35、高知大学人文学部
国際社会コミュニケーション学科

丸井一郎 (2006)

『言語相互行為の理論のために－「当たり前」の分析』、三元社

養老孟司・茂木健一郎 (2003)

『スルメを見てイカがわかるか!』、角川書店